

# 茶の湯文化学会会報 No.28

第28号/2001年2月1日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www2.ocn.ne.jp/~chanoyu/ e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## 「かるい」建築について

目 次 進

このところ「かるい」建築とは、ということについて考えています。建築史の立場から京都の町家を研究課題の一つとしているなかで、井原西鶴の「京作りの立家かるうして」という表現（『浮世栄花一代男』）という表現に出会ったのがきっかけでした。

西鶴は、町人社会が最も成熟したといわれる元禄時代を中心として、町人の生活をいきいきと描いたことで知られています。近世の京都の町家を描いた建築図面で、これまで私が知り得た最も古いものは元禄年間のもので、現在の町家との大きな相違は認められませんが、西鶴の草紙の時代と重なっています。

西鶴は別の草紙（『本朝二十不孝』）で、表構えに檜の台格子を用いた泉州堺の店の、唐木や金銀、螺鈿などをふんだんに使い、唐物で飾りたてた座敷を「むかし座敷」と表現しています。

町家の表構えの中心は格子です。その格子には多様な形式がありますが、堺格子、京格子と呼ばれるものがあります。

堺格子というのは、太い格子に教条の横貫を通したもので、堺の鉄砲鍛冶の店先に建て込まれていました。内側には板戸が建てられるので、夜間にはいっそ

う厳重な構えとなります。戦国大名の力関係や戦闘形態を一変させた、鉄砲という当時の先端兵器を扱うにふさわしい、無骨でいかめしい構えでした。

一方、木柄の繊細な格子を千本格子とか京格子といいます。木柄の太い台格子や丸太格子が、建築生産技術や工具の発達とともに徐々に洗練の度を加え、千本格子に到達しました。都風への憧れを込めて「京格子」と呼ばれるようになったそれは、近世における町家にとって理想モデルとされたのです。

ところで堺といえば、西鶴とほぼ同時代に「京は着て果て、大坂は喰うて果て、堺は家で果て」（『商人職人懐日記』）といわれていました。着倒れの京都、食い倒れの大阪（阪）に並んで家倒れの堺、つまり家の普請に贅を尽くして身代を潰してしまいかねない土地柄とされていたのです。

海外にも開かれた貿易港として繁栄した堺は、戦国時代にはその活動力がピークに達し、さまざまな物品が海外からもたらされました。このような環境のなかから千利休らによって侘び教寄が完成されるのですが、一方で財力に任せて珍奇な品々をふんだんに注ぎ込んだ「教寄」の世界も展開していたはずですが。

さて「かるい」という言葉をどのように評価するかということになったとき、まず思い浮かぶのが桂離宮のことです。すなわち、八条宮の別荘として建築が始まった元和四、五年（一六一八、九）頃とみられる初代智仁親王の書状に「下桂、瓜島之かるき茶やへ陽明御成申候」という文言がみられるのはよく知られるところです。

桂離宮の建築は先年全面的に修理されましたが、その工事を担当した大工さんたちの所見によれば、用材はほとんどが「地のもの」、つまり近隣の山から産したものだそうです。北山や丹波から筏に組んで桂川（保津川）に流し、陸揚げされたのが嵯峨や桂離宮の近くにあった筏浜でした。

京都の町家も同じようにして運ばれてきた杉や松を主体にしています。このような町家に対して、住み手や大工は「仮屋建て」という表現を用いています。「仮屋」という言葉には、装飾過剰で事大主義的な堺の町家を「むかし」風Ⅱ時代おくれだと評した西鶴が、「京都の町家を「かるうして」と表現したのと相通ずるように思われてなりません。京都というより日本の建築文化を代表するといふべき桂離宮の建築が「かるき」と書き留められた

ように。

「仮屋」のようにさりげなく組み立てるための工夫を積み重ねてきたのが京都の建築的伝統でした。そして身近な素材に精緻な技術が注入され、洗練された造形として結実しているのが京都の建築ではなかったか。「かるい」とは軽佻浮薄ということでは決してなく、本来は重厚なものを軽妙に表現するということではないか。

「かるい」という言葉には京都が育ててきた建築の本質がひそんでいるように思われ、さらに補強すべく材料をもとめているのですが、実はあまり手応えがありません。この点について、ご教示いただければ幸いに存じます。

**平成十二年度大会**

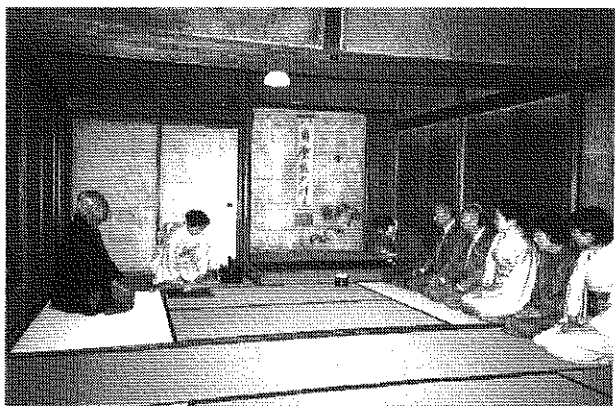
本年度の大会を、十一月十八日と十九日の二日にわたり開催した。

（十一月十八日）

本学会の林屋晴三副会長に席主をお願いし、大徳寺高桐院において茶会を開催した。天候にも恵まれ、参加者は、利休好みの道具と茶を十分に楽しむことができた。林屋副会

長には、道具の準備、それに点前・後見と大変な御心労をおかけした。主な道具は次の通りである。

竹二重切花入 利休作  
阿弥陀堂釜 与次郎作  
黒棗 宗旦在判  
赤楽茶碗 長次郎作  
竹茶杓 少庵作



（十一月十九日）

池坊短期大学において、五人の研究発表

と、林屋副会長による講演会を開催した。それぞれの概要は次の通りである。

**研究発表**

**社会的機能から見た中国茶館の変容**

一九九九〜二〇〇〇年四地区

実地調査を中心として

齋藤 美和子

中国の伝統的喫茶施設・茶館は、唐に始まり、宋代に発展・普及し、明・清代には爛熟期を迎え、近代に入って一時衰退したが、開放政策後復活した。茶館は生活上の必要から発生したと考えられるが、そこに交流・情報流通という機能を付加して発展した。

現代においては、経済動機により都市部で茶芸館が増加する一方、高齢者による非営利的茶館利用が存続、かつての情報流通メディアとしての茶館利用はほぼ消失したと考えられる。茶館は共同体を形成する役割を持ち、かつての地縁、血縁、幫（職業ギルド）といった伝統的共同体からはずれた人々に生活の場を提供し、社会構造のひずみを調整する役割も果たしている。

大部屋・相席構造の茶館は共同空間に非組織的な交流の場を提供し、個室・間仕切り構

造の多い茶芸館は人と情報の流れを制限して「個」を尊重する。茶芸館は中国茶の飲用習慣を維持継承していく点で大きな役割を果たすかもしれない。だが、旧来の茶館の共同空間は、新しいきずなを創出する機会を内包しているのではないだろうか。



太閤園淀川邸（旧藤田徳次郎邸）

茶室棟に関する調査報告

岩崎 正弥

大阪都島に藤田伝三郎により、明治四十三年より大正三年にかけて次男藤田徳次郎の居宅として建てられた徳次郎邸の茶室棟の特徴は、

①邸宅全体の中で、来客に便利な場所を与えられ、且つ庭園の中で象徴的な役割を演じていること。

②邸宅と回廊で結ばれ、玄関・待合や大書院・洋食堂・数寄屋座敷などと連携して多様なもてなしに応用活用できるようにされていること。

③茶室棟の中にも「真行草」各段階の茶室を設けていたこと。すなわち、数名の数寄者を招いての茶事の舞台となる書院に「残月亭」写を、やや崩した野趣ある庵に「大炉囲い」を、草庵茶室「萩」に一畳中板で、と役を良く心得て按配されていること。

④特に草庵茶室「萩」は、一畳中板と極限まで狭く凝縮し、点前畳の台目との間に道庵囲いを施すなど創意工夫に満ちていること、などが指摘できる。

『東都茶会記』に記録された長男藤田平太郎の網島本邸での茶会は、小間・広間・大書院を駆使したものであったことを勘案すれ

ば、藤田伝三郎の指図によって出来たこの茶室棟もまた、関西近代数寄者の古典的な教養、近代的な社交機能、茶人の創意工夫を併せ持っている、と云えよう。

### 水屋についての一考察

飯島 照仁

茶の湯空間の一つである現在の水屋は、茶室に隣接して設けられ、主に茶道具を清め整え、点前などの準備をする水屋の間を意味する。「水屋」は「勝手」から変化したと考えられる。

「水屋」の語の初出は『長閑堂記』であるが、作者である久保権太夫が春日神社の神職であったことから、春日神社の外院水谷（みずや）神社と関係があると思われる。水谷神社は水屋川にそうが、水屋川の水は神供用に使われており、室町時代の初め頃その下流は神官の禊の場であったことから、水屋川の水は聖水と考えられていたといえ、水谷神社はもとは神聖な川（水）の神と考えられていたといえる。

神社仏閣に隣接して備えられている閑伽棚は、水屋と機能の点で類似性が多いが、久保権太夫が自らの草庵に閑伽棚様のものを作

り、水屋と名付けたのは、水谷神社や水屋川に因むのであり、神仏のための閑伽棚をも包含する広義の意味での「清めの場所」と考えたからではないだろうか。

### 茶湯における心理療法的問題

友久 茂子

茶湯と心理療法とは次のような点で共通点を持つ。

- ①非日常の場におけるイメージ体験である。
- ②心理療法も茶会も「専門的訓練を受けた者」によってのみ可能となる。
- ③「茶室」と「面接室」の非日常性
- ④感覚刺激と言語的コミュニケーションを利用する。
- ⑤宗教的側面を持っている。
- ⑥亭主と客関係は治療者とクライアント関係ともいえる。

茶湯の心を表す言葉として「侘び教寄」がある。侘びは執着の無さを前提とし教寄はものへの執着を意味する。このように教寄は対立的な関係を孕んだ言葉であるが、ユングの言う意識と無意識の相補性として捉えることができる。具体的な例で考えれば、「侘び」と「教寄」の両面、ユングの言う「全体性」

是の名が見られる。津田家の茶の湯はかなりの評価を得ていた。

③宗及の茶の湯は利休のそれと比べると、台子や広間を使った古いものであった可能性が高いが、利休没後宗及の茶の湯に近いものが復活したのではないか。

### 特別講演

#### 利休のわび道具

林屋 晴三

ずっと利休を、道具を通して感じ取ろうとしてきたが、近年いくつかの利休道具を手許に置くことで、利休との会話ができつつあるように思う。というのも、利休は文字だけでは理解できないと考え、積極的に利休道具にふれるように努めてきたからである。しかしながら、まだ利休をはっきりとわかっているとは言い難い。ただ、利休はすごい人、前衛的精神を持っていた人、最後は切腹をするすさまじい人であったと感じている。

道具から見て、利休の茶は天正十年から亡くなる天正十九年までの間に、急激に深まり完成したといえる。この時期利休は権力の中枢にいたが、一方でわび教寄を深め得たのは極めて強い意志・思いがあったからである。

この利休のわび教寄意識で捉えられるものを見ていきたい。（この後はスライドを使った講演）



### 東京例会

十一月二十五日（土）午後二時から、東京芸術大学において東京例会を開催した。発表の要旨は次の通り。

#### 川柳に茶の湯をみる

村上瑛二郎

従来、茶の湯と文学の関連を論じたものは多いが、川柳と茶の湯に言及したものはないようである。風雅な茶の湯に対し、川柳は凡そ俗なものだから無理もない。しかし江戸時代の日常生活から生まれた笑いである川柳に、茶の湯に関するものも結構多い。全体の句数の中では微々たるものではあるが、それでも現在四百強を数える。それを探ってみることは、江戸の一般庶民の中で茶の湯がどう浸透していたかを知る一助にはなるであろう。

有名な「誹風柳多留」の初篇の刊行は明和

を全うした利休は、相当な満足感を持ったと推測でき、「教寄」にこだわった秀吉は十分な内的充実感を感じていなかったのではないだろうか。

このように心理療法と類似点を持つ茶湯は、心理療法として精神生活に貢献できるのではないか。

### 宗及・宗凡とその周辺

影山 純夫

桃山の茶の湯の歴史をふり返るとき、利休が語られるのは当然として、宗及や宗久があまり語られないのはなぜだろうか。利休もこの二人の存在を意識していたはずである。宗及や宗久の研究をなおざりにすることは桃山時代の茶の湯の歴史研究に空白をつくると考え、ここでは宗及とその子宗凡、そしてその一族の人々について述べる。

①『南坊録』での宗及の評価は高く、『槐記』ではほぼ同格の茶人として捉えられている。宗及は利休の茶の湯の上での好敵手であった。

②『輝元公御上洛日記』に毛利輝元と宗及・宗凡との深い交わりが見出され、毛利家の『分限帳』に天王寺屋一族と思われる津田宗

二年であるが、茶の湯関連の川柳は、その大部分が文政・天保以降のものである。これから以下の事が類推できよう。江戸で千家流の茶の湯が一般町人階級にまで広まったのは、川上不白が宝暦五年に再度江戸に下った以後と言われるが、横丁のご隠居さんのような町の底辺の知識人達にまで、教養あるいは遊芸として広がり、全く無教養な者でも、茶の湯というものが世の中に存在するという認識を持ったのは、不白が没した文化四年以降のことかと思われる。庶民階級の経済的発展と共に、その生活はゆとりを持ち、遊山・芸能・読書などに親しむようになり、茶の湯にも多数の参加があったからこそ、嘉永以降には江戸茶人番付、形物香合番付という趣味的な遊びのものも出されたと考える。おそらく、天保から安政末の時代の変動期迄が、茶の湯人口は、近代の復興迄は一番多かったのではないか。「膝栗毛」「和合人」等の滑稽本や黄表紙などから微しても、川柳が取り上げた茶の湯の題材を見てもそう感じる。

今回は、茶の湯の故事・逸話を詠じた句、百五十を紹介、解説した。句数として最も多い利休と秀吉・売茶翁・吉良上野介・明恵を初め、足利義政・紹鷗・松永弾正・織部・遠

州・宗旦・不白などの他、佐川田喜六や細川家の中山の茶入に関する句まで題材にされている事から、江戸の一般人の茶の湯に関する常識的知識が意外に広がったことが判る。

#### 下総国生實藩主森川家の茶の湯

小倉 光夫

柴屋軒宗長の「東路の津都」に「原宮内少輔胤隆の小弓の館」とある原氏は、小田原攻の秀吉軍の酒井左衛門尉忠次によって滅ぼされ、西郷弾正左衛門尉家員が入封し、その後秀忠近習の森川出羽守重俊が入封し明治の廃藩置県まで続いた。

近習の重俊は大久保長安事件に巻込まれて改易となったが、寛永四年に赦免となり、一万石で再召、同八年には西の丸老中に昇進した。寛永九年將軍秀忠が没すると、重俊は再召で老中職までに預かった御恩へと殉死した。重俊は殉死にあたり遺書を小堀遠州政一と竹中采女正重義宛に認めている。重俊の遺翰は四通が千葉県文書館の森川家文書の中にある。

重俊の長兄金右衛門氏信の嫡男庄九郎氏之は旗本で、長姉は成瀬隼人正正成の室、妹は土屋民部少輔忠直の室である。小堀大膳正之

しい呼吸法の重要性を述べられている（『雑阿含経』第二十九第十経）。

白隠禪師（一六八五〜一七六八）は、臨濟禪の中興の祖と仰がれた人である。不治の難病（肺病・ノイローゼ・禪病）で苦しんでいたが、二十六才の時、京都郊外白河山中の白幽仙人について内観の法、呼吸法を学び難行を克服、弟子や禪の修行者その他、難病で苦しんでいる人たちを数多く救ったが、『夜船閑話』『遠羅天釜』の著書を出して後世のために残し、傑出した禅僧としてだけでなく医僧としての本領を發揮した。

気海丹田・腰脚足心の下半身に気力を込め「内観の四則」を繰り返して行い、丹田呼吸法によって、自分の難病を治し多くの人々を救ったのである。

宗旦の『伝授開書』でも「茶を点てるにも、道具を扱う時も、心の底に込めた力を抜いてはいけない」「茶を点てる時に大切なことは腰に力を入れること」等、下腹部丹田を充実させ、腰に力を入れて姿勢を正しくして茶の湯に対処すべきことを述べている。

茶道をはじめ「道」と名のつく武道、芸道等が、宇宙本源と繋縁し、それと一体となることが目標である限り呼吸の真髓をマスター

の室建部丹波守政長の女は僅か二年で罷り、森川氏との女と再婚した。建部政長の室は酒井忠勝の女であり森川氏との妻の姉にあたる。森川家も建部家も小堀家も大老酒井忠勝との縁戚関係にあり、特に「玉露叢」にある遠州の寛永江戸詰四年の頃の引負事件と嫡男大膳正之の再婚を含めて大老の支援を受けていた家族であったと言えよう。

森川家の風雅は代々の藩主によって受け継がれた。二代重政の室は板倉周防守が女、四代俊胤は悠計と号し石州門下の茶人、六代俊令は善應と号し新井一掌門下、七代俊孝は泰崇院と号し怡溪派朽木綱貞門下で多くの箱書を残す。八代俊知は不味流を朽木昌綱に学ぶ。

十代俊位時代に編纂の森川家「御茶器目録」を、今回森川家文書から見つけることが出来て翻刻をした。茶の湯道具三六〇余点で一番から五番の長棹に収められた茶碗六三点、香合五八点、茶入四三点、水指二八点、薄器二五点、釜一四点などが主で水屋道具まである地方藩主の実際に使用していた道具帳である。

#### 高知例会

して、理論だけでなく実践によってそれを把握することが最重要課題であると思う。



#### 茶の湯と瓢箪（下）

山下 桂恵子

五島美術館図録「山上宗二記 天正十四年の眼」（平成七年十一月）には「瓢箪の切り型」が掲載されており、『大正名器鑑』の上杉瓢箪茶入実見記の「…胴に二線あり、上の一線短く下線稍長くして、茶入三分の二以上に亘る…」は、この切型によく一致する。また茶入の寸法は「高二寸一分五厘、胴径上の膨み一寸九分、下の膨み二寸」とあって、これは松本珠報所持の瓢箪茶入の寸法にほぼ符合する。以上のことから「宗二記」記載の瓢箪茶入は、北野大茶会の「金の御座敷」に飾られた茶入、すなわち今日の上杉瓢箪茶入ではなかるるか、と思うがいかがであるるか。ちなみに山上宗二は同年三、四月の交に高野山に上ったと思われるので、「豊後二在」った瓢箪茶入が秀吉に渡ったことは知らなかったらう。

ところで当時の茶会記に瓢箪茶入の使用は

十二月十一日（土）午後三時から、J R土佐荘において高知例会を開催した。発表の要旨は次の通り。

#### 茶道と呼吸について

中内 雅康

茶道は「茶の湯の第一、仏法をもって修業得道することなり」（『南坊録』）。また茶祖村田珠光をはじめ、紹鷗、利休、宗旦等すべて禅僧に参じて、茶の湯は禅道を極めること、即ち「茶禅一如」であることを実践によって後世の人に伝えんとした。

仏教の本尊である釈尊は、初めは難行苦行の修業を試みたが、最後に「呼吸」によって悟りの境地に達することができた。

釈尊は『大安般守意経』の中で呼吸の方法について詳しく述べられている。瞑想時には、心の鎮静を図る「長呼吸呼吸法」。行動時は、全身内臓の強化に役立つ力強い呼吸「短息」を用いること。長息では「出息長、入息短」が原則。そして呼吸の進展していく段階として、「数息・相隨・止・観・還・浄」の六段階を示され、悟りの境地に到達するキーポイントは「呼吸」であることを提唱された。また祇園精舎で多くの弟子達を集めて正

見られず、北野大茶会記録に唯一記されるのみである。

秀吉が上杉景勝に瓢箪茶入を授けた時期を考えてみたい。景勝の孫綱勝が正保二年（一六四五）十二月二十九日、父（定勝）の遺物として瓢箪茶入その他を將軍家光に献じている（『寛政重修諸家譜』七四五）が、この瓢箪茶入は祖父（景勝）伝来のものと考えてよいであろう。『大正名器鑑』には「聚楽にて秀吉御手つから上杉中納言景勝へ下され、子息定勝まで五十年の間所持す（享保十五年自序神田白龍子著（雑話筆記）」と見える。これが事実なら景勝は文禄三年（一五九四）十月二十八日、秀吉を聚楽の私邸に饗している（『寛政重修諸家譜』）ので、この折りに賜ったのかもしれない。翌年、景勝は大老職に任ぜられている。

関ヶ原役の発端、景勝が蹴起したのも宜なる哉、といいたい。 たまたまテレビドラマ「葵 徳川三代」で家康の馬印を見、秀吉の瓢箪馬印が思い出され、そして北野大茶会の「金の御座敷」に飾られた「御茶入ひやうたん」が思い合わされたことだった。

## 例会のご案内

### 高知例会

次の日程で開催します。会場はJR土佐荘（高知市丸ノ内）です。多数のご参加をお待ちしています。

○二月十一日（日）午前十時

「森田久右衛門日記について」 小松 聡

○四月（日時未定）

「茶道玉緒について」

永吉 溪滋

### 近畿例会

近畿例会として、今年度は新たに若手研究者の発表の機会を設けることにしました。若手研究者を育てるためにも多くの会員にご参加いただき、あたたかいご意見をお聞かせください。会場は池坊短期大学（京都市下京区四條室町鶏鉾町）です。

○三月十七日（土）午後二時

近世後期南河内地域における茶の湯

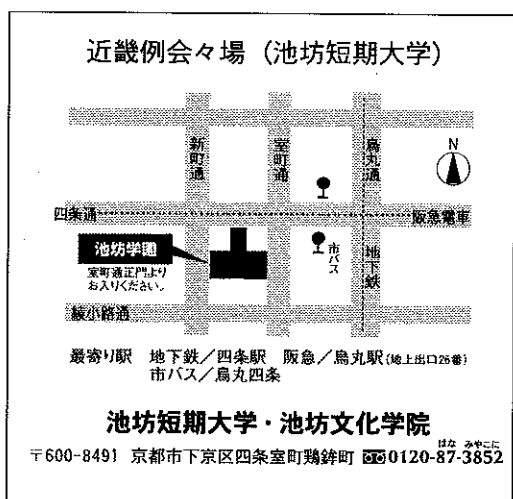
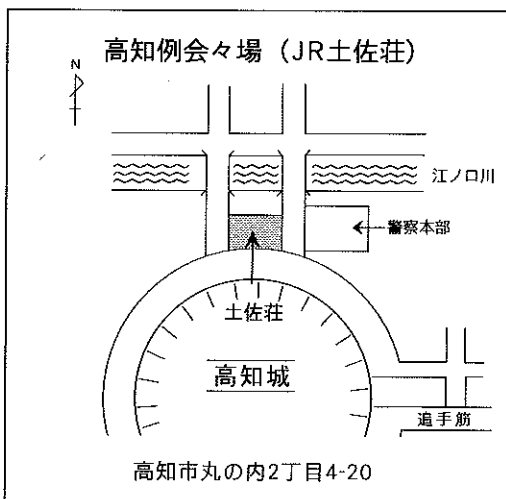
―富田林杉山家・仲村家の事例を中心に―

堀内 紀彦

『茶経』研究の諸問題

―中日の比較研究を中心に―

顧 雯



### 後記

\*本年度最後の会報をお届けします。もう少し早く発行できるように作業を進めていたのですが、コンピューターが問題を起こしました。機械に頼るとこんなことがあるのはわかっているのですが、用心が足りませんでした。そのため、高知例会のお知らせがぎりぎりになってしまいました。申し訳ないと思っています。

\*三月九日から十一日までロンドンで「近世における日本、ヨーロッパの飲み物」学会が開かれます。国立民俗学博物館館長石毛直道氏の基調講演の外、本会の熊倉理事や小川後楽氏の講演会も開かれますので、興味をお持ちの方は事務局までお問い合わせください。

\*例会のお知らせは会報によることになっており、特別な場合を除いて改めてご案内はいたしませんのでご注意ください。また、インターネットのホームページや、電子メールもご利用ください。

\*四月の高知例会の日は事務局までお問い合わせ下さい。